

鈴鹿短大 水谷令子, ○西村亜希子

〔目的〕キルギスタンの食文化の一側面を知るために、市民が利用する首都ビシケクの1つのバザールの調査をした。

〔方法〕調査は首都の中心地からややはずれたアラメジンバザールで1994年8月1日午前に行った。肉売り場を除く全生鮮食料品売り場182店で面接聞き取りをした。調査項目は販売品名、販売量、価格、売り手の性別、人数、民族名、居住地である。

〔結果〕乳・乳製品は7種類で各店は小規模でコルホーズで家内工業的につくられた品物を販売している。キルギス人の他、トルコ人、ロシア人が売り手である。野菜はドンガン人（中国系）が多く、多種類の野菜を少量ずつ売っている。コリアは大量のスイカやメロンを売っている場合が多く、ロシア人は果実を売っている人が多かった。

売り手は男性22%（45名）、女性78%（160名）でほとんど1人（88名）である。売り手で多い民族はキルギス人29.8%、ドンガン人27.3%、ロシア人18.5%であった。